

異にしてゐる以上、從來の傳統ドクマは悉く打ち破られてしまつてゐる。就中、廻向を力説せらるゝ所は最もよく眞宗に對するハンス・ハーゼ者流の謬見を正す

ここが出来ることと思ふ。

遮莫本書の如きは外的には今まで歐米人の腦にこびり付いてゐた疑網を跡方もなく摧いて彼等が心から我が教へに親んでくる機會を與へ、內的には佛教研究の上に新しきエポック、メーキングを作り得たことに於て恒久的な價值を持つてゐると思ふ。そして曾てレヴ井氏が「淨土教を以てベルシャ思想に擬せん」とした「こ」を憶ひ出し、恐らくこの年末には本書を手にするこゝ故新しい春が訪れるこゝ、之を披いた氏がこんな感を起すだらう——恐らく非佛教説を徹回して呉れるだらうこゝを想念しつゝ、私は心からの歡びを禁めるこゝは出来ないのである。

最後に本書の述作を以て之れを基督教々學界に於けるハルナツクの勳績に比するものである。

(本稿は一夜早卒の間にものせしもの故頗る杜撰なもので精確な考查は他日を期することとする。)

新刊紹介

宗教哲學概論

帆足理一郎著

人間のたましひに深くねざしかくて人間こゝもに永遠なものゝ宗教でなくして何であらう。けに宗教の世界こそたましひの遊ぶ世界である。故に殉教者の歴史は古く、且つ人間こゝ共に宗教こゝ共に永遠なのである。此森嚴なるそして懐かしい宗教の體驗——歴史的にも或は人間的にも——に對して知性の光をなげかける努力こそそれは宗教に關する學問の生誕である。學問においていろ／＼の立場が存立する如く從つて宗教に對する學問にも亦いろ／＼に成立する根基があるであらう。このものゝ一つに哲學の歴史の如く古い宗教哲學が存する。宗教哲學とは何であるか、古今三千年、東西兩洋ひろく論ぜられ研究され乍ら自然科學が明な道を發見して進むやうには進むべき道が示されて居らない様である。カントに依つてやゝ暗示せしめられたやうながらまだその本道に進み出て居るこゝは思はれない。斯る廣漠なる宗教哲學の學問界にそして我邦の學界に

日本宗教史

比屋根安氏著

(定價拾圓) 東京市牛込區新小川町
(二) 四三 共出版會社發行

こに角八百頁に亙る彪大な本書が慧星の如く出現したことはまことに意味あることであるから敢て諸君の座右にすゝめておく。宗教哲學がまことに如何なるものであらうか云ふことは各公立大學において、且宗教研究を唯一目的とする數多の宗立大學において或は盛んに、或は細かく論議されて居る盛大さであるからこゝには論ぜないが、兎に角本書は著者自らの獨特唯一の立場からひろくその中に宗教史あり宗教心理學あり宗教に關する認識論的且形而上學的研究部門ありて論述せられてあるが故に、宗教に關する學問の殆んゞ凡ての部内が「宗教哲學概論」なる一書に依つて研究されること云ふ便利さの點からも亦私は本書を諸君に敢てすゝめるであらう。たゞ參考までに次に本書の編次の大略を書いておく。菊版總クロース頗美本、價五圓八拾錢(東京市日本橋區博文館發行) K T 生

第一編 序説。第二編 宗教の發生學の考察。第三編 宗教の史的考察。第四編 宗教心理學。第五編 宗教認識論。第六編 宗教形而上學。

本書は大正十四年度日本思想界に於ける重要著述として指折のものである。菊版千餘頁の大冊で活字の分量からいつてもこの種の著述としては殆んゞ空前のものである。本書の新出版を時を同じうして書肆に現はれた土屋詮教氏の改訂出版なる『日本宗教史』も従前の大著であり、比屋根教授のそれが土屋氏の研究成果を套襲せる點もあるが、比屋根氏獨特の領域は戰國時代以來日本に移入せられてきた西教すなはち基督教の如何なるものであり如何にそれが日本に於いて發展し今日如何なる狀態に達したかといふことを先づ考へそれを日本の歴史に密着せしめてそれに對する種々の意見に行く／＼批判を加へようとした點にある。従つて儒佛兩教本位の從來それに對して現實日本思想界より逆觀しての『日本宗教史』が比屋根氏によつて企劃せられたことは基督教思想史の日本的登記登錄となつたに相違ない。また佛教思想に自任する人々も新來の基督教思想の心持では日本史は如何に取扱はれるものかといふことに多大の興味をもつて本書を迎ふるこゝが出来よう。

エルネスト・ラヴィツスの歐洲政治史論などに一度眼をふれたものは從來日本歴史の書き方が如何に偏倚的機械的であつたかを思ひ知るのである。政治といふことは何も神道思想家の主張を待つまでもなく宗教なり、また一般文化と切離して考へられるものではない。政治史は必ず思想史と共に考へられねばならぬのである。かういふわれらの宿望は思はぬところから實現の緒についた。即ち比屋根青山學院教授の『日本宗教史』を繙けば日本歴史が從來よりも一層よくわかるのである。各時代の學術、藝術、宗教を見てゆく政治經濟生活の裏面が段々さあきらかになつてくるのである。その時代の人心を最も強くこらへたものは何といつても藝術と宗教とである。その藝術宗教を窺はうとして思想的文獻を展覧するに國家國民の生活が壓搾映出さるゝのである。比屋根氏はさきに井リナム・ジェイムスの「宗教的經驗の諸相」を翻譯せられた人である。ジェイムスは人も知る近時アメリカ經驗哲學の大立物である。忠誠の哲學を稱へたロイスと對立する學究思想である。此屋根氏が『日本宗教史』の方法論として、「宗教學が新宗教を創意しない事は詞を俟たず、科學的方法に據るを以て敢て價值判斷を下さない。宗教現象

を、經體的に、聚集し、嚴密に解剖し、詳細に比較し、以て一般宗教に亘つて統一的説明を與へその間に一貫する普遍的法則を發見するのが宗教學の本務である」こいふのはマクス・ミュウラア以來の宗教の科學的研究にジェイムスの實用的見地を注射したものこいふべきである。

しかしながら比屋根氏は單に歐米の宗教學者宗教史家に準據したものでなくそれらを綜合せる恩師の史の見地を舉揚するを憚つてゐない。いはく「姉崎正治は日本宗教史上にて特筆すべき人である。博識多才なる彼が、日本宗教史に於ける啓蒙家、學究、批評家、調和者、外交家、詩人こいふ諸相を網羅せる點に於てわたくしは他に匹敵するものなしと斷する」こいつて、姉崎博士の著『復活の曙光』を「日本宗教史に於ける復活の曙光であつた」こいつてゐる。姉崎博士の宗教學宗教史に對する方法は宗教現象の經驗的蒐集こいふこゝが第一となつてゐる。この方法論の比屋根氏の努力によつて實現提示せられた最も著明なるものが本書であるこいつてよい。それにつけて比屋根氏がキリスト教傳來の研究に出精せると共に聖德太子の御思想御事蹟を從來こはいやまし懇切に考證說示せる學究的誠實

を姉・崎博士年來の貢獻と共に注目せざるを得ぬのである。

蘇我馬子の大逆罪に對する徳川幕府御用學者の聖徳太子讒誣について「厩戸皇子の母間人皇后には兄弟五人おはし、そのうち穴穗部・崇峻天皇は非命に斃れ給ふた。皇后の子なる厩戸皇子の心中には無限の悲憤があつたに違ひない」と事實に隨順せる觀察を示し「また崇峻天皇を弑した東漢直の一族……の罪狀を見るに大倭朝廷の際に乗じて帝王や貴族を黷弄した事は頗る分明である」といつて稚郎子乃至聖徳太子の反撥的出現の裏面（外國智識を武器とする譯語の横暴）を暗示する點はさきに横山健堂氏の史論のあつた點をも攝取構成し得て居るのである。

また明治時代のキリスト教攻撃の條下で「彌陀一佛にのみ頭をさけるべき筈の眞宗教は、キリスト信徒内村鑑三が御眞影に宗教的禮拜せざりし事を難詰し、また世界的なる佛教徒がキリスト教を非難した訣は、キリスト教が國家主義的教育に矛盾するが故でなく斯教が佛教を壓倒し日本を風靡せんことを恐れるための宗教戦争に外ならなかつた」——といつてゐる。眞宗學徒、佛教學教たるものこれらの批評をそのまゝに黙過

するつもりであらうか、特にこゝに注意しておく。

なほ比屋根氏が、石山合戦に於ける顯如上人の意圖なり秀吉、家康のキリスト教または神道に對する態度についてその裏面を洞察するにつこめたあたりはキリスト教傳來に相並行しての面白き讀物であらうし、また氏が川柳なぎを根拠よく集め列ねたのも本書の趣味解放味を示す。

今こゝでこの千餘頁の大冊に對してその細部について要求をのべる餘裕はないが 平安朝代、教信沙彌の念佛農民生活、鎌倉時代、信實の表情畫の價值、信海阿闍梨の元寇當時の偉作、桃山時代の直庵の雄作を逸し、また明治維新の起原を普通には水戸光圀に歸するに對して山崎闇齋のみを特筆せるごききも未だ觀察の周密ならざるものかと思ふ。水戸光圀よりも先輩なる山鹿素行がその師林羅山の御用學に反撥して秀吉を稱揚し楠公の兵學原理を世に發表し『中朝事實』を著して無比の國體内情に隨順する倫理學に形而上學を示した元功原動力を逸せしこゝは遺憾である。

日清戦争の條下では「キリスト教徒が國賊視されるうちに日清戦争が起り、キリスト教徒に忠君愛國の觀念ありや否やを試験する好機會が來た。キリスト教

彙報

佛教學第一研究室

一、十月二十日

淨土ミ涅槃

金子教授

勇猛心のありしこゝを録しておく」ミ論評するあたりを見るミ、いふころの科學的方法も價值判斷を避け得ぬやうであるが、この點について比屋根氏の意見を徴したいものである。

なほ氏は「現代の宗教界の實に混沌たるを見て自失せざるを得ない」ミいつて大正十二年間の宗教史について「混沌裡に彷徨して茫然自失せる」を訴へ「好意ある憐愍の視線」を要求してゐるミが、社會的評判ミいふこゝミ、史的要求ミいふこゝミを一致せしむる必要はないのであるから最近史に對する觀察は極度に範圍を狭め切磋隨順のいづれにしても師弟の際さい反照的一點に集中するならば困難を感じらるゝほどのこゝはなからうミ、思ふがまゝを忠告しておく。猶予は本書に對しては他日いつくかに於いて論評しようと思つて居る。(井上右近)

一、十二月十四日

眞宗に於ける現世祈禱論

河野教授

多數教授、學生參會し盛會なりき。

佛教學第二研究室

十二月七日 月曜日

本研究例會ミして左の講演を第七教室に午後三時より開く。

史上の龍樹は三人也

寺本教授

當時聽衆學長以下數名なりき。因みに寺本教授の研究はじめて本學内の諸教授に發表せられたる譯なるが未だ首肯するに至らなかつた。